

明  
書  
卷  
1.368  
12

環海異聞卷之十一

却看洋面中之上

四五日頃候に、身も心も不承不承と、

たゞ、身も心も不承不承と、

一、海流人も、身も心も不承不承と、

東島へも、身も心も不承不承と、

て、是れ、身も心も不承不承と、

環海異聞卷之十一

都府澤田中之二

國王の通りしゆをとおしんが事かを飾り  
たてよる車馬たよりしゆ

一 漂流人外土の節の前をいしゆや毎夜  
車馬たよりしゆの人の或人令集り  
て見物あましくさしゆを不作法のみり



心せの如くあつて、かく名振るべし  
下知あつし

先帝の時、通称の兵車、言振百五十疋  
又才百疋もあつた、万金を金において  
質を以てして馬数四十とあり、是れ百金  
す、是れも兵車と云ふといふ、これ兵車  
利の費、少く、前時より、おの簡約也  
此れ、兵車の中、使帝の御禮なり、又曰我、ムス、と云  
掃部の時、格式の通の、世人、教あり、玉王の御幸、陪



此の同勢別て、不長、た、れ、の、  
往、來、之、邊、を、指、す、り、し、と、も

居館の前、して、兵、騎、數、百、人、一、列、し、て、皆、の、装  
束、を、お、し、銃、炮、の、兵、持、持、と、あ、す、け、時、國、王、並、高、官  
の、人、々、も、亦、亦、あ、つ、た、り、し、と、も、  
點、檢、せ、ら、る、と、し、一、月、の、  
三、回、通、も、あ、つ、た、り、し、と、も、オ、シ、キ、リ、セ、ン、ヤ、と、し、し、日、の、  
あ、つ、た、り、し、と、も、兵、騎、各、銃、炮、と、持、ち、肩、並、兵、並、と、持、ひ  
給、り、出、し、王、の、見、分、の、前、と、り、返、し、し、と、も、通、り、あ、つ、た  
俗、人、並、皆、之、を、列、と、持、ち、當、時、笛、大、鼓、の、鳴、  
カ、ッ、ミ、シ

物とありしに拍子と意と進退するよしは是か  
信んでは日王のあり館内のある寺院は訪らざり  
たよりのありては式とて是の亦の意  
あるものよし

都の度日本里教の式里四方もある

一丁の長さ日本の一丁より少くもきりたる事

按里教の事本篇に詳す

町と迂る屋作り石造り結構めて皆きり構ひて

立派なり家作ハ富有の者のこ中合せて造築する事  
如は能く並堅固ふきり揃也とて多者の多に皆は借  
屋も居位とて多き者とも極多の者といふ訳あり  
あつたるの大造の家作ハ自身ハ出来ぬといふ程の  
事也堀川縦横も通りて江戸江府内のみくとも事

一書物店吳波屋時斗屋をも多く見らけり

大光回して高店ハふきりてあり二階と下屋と二階  
おも麓下おも人の往来の通りあり町並ハ市店ハあり  
皆六階作りて王居ハ五階ありも屋作度大ありあり下屋土間  
あり物並ハ二階厨三階位居四階以上庫蔵の用とす

街衢圖



江戸相屋もあつたはれは是れ高き

一遊女屋何れも是れ不見 凡そ妻女何れも

遊女の行幸停止のよゝ市中芝居屋も何れ

一逢申を食ひん無き

一穀物等山亭ありて自生をよと田舎あり

山亭ありありあり

一氷りのぬき塔あり 相て山塔の地

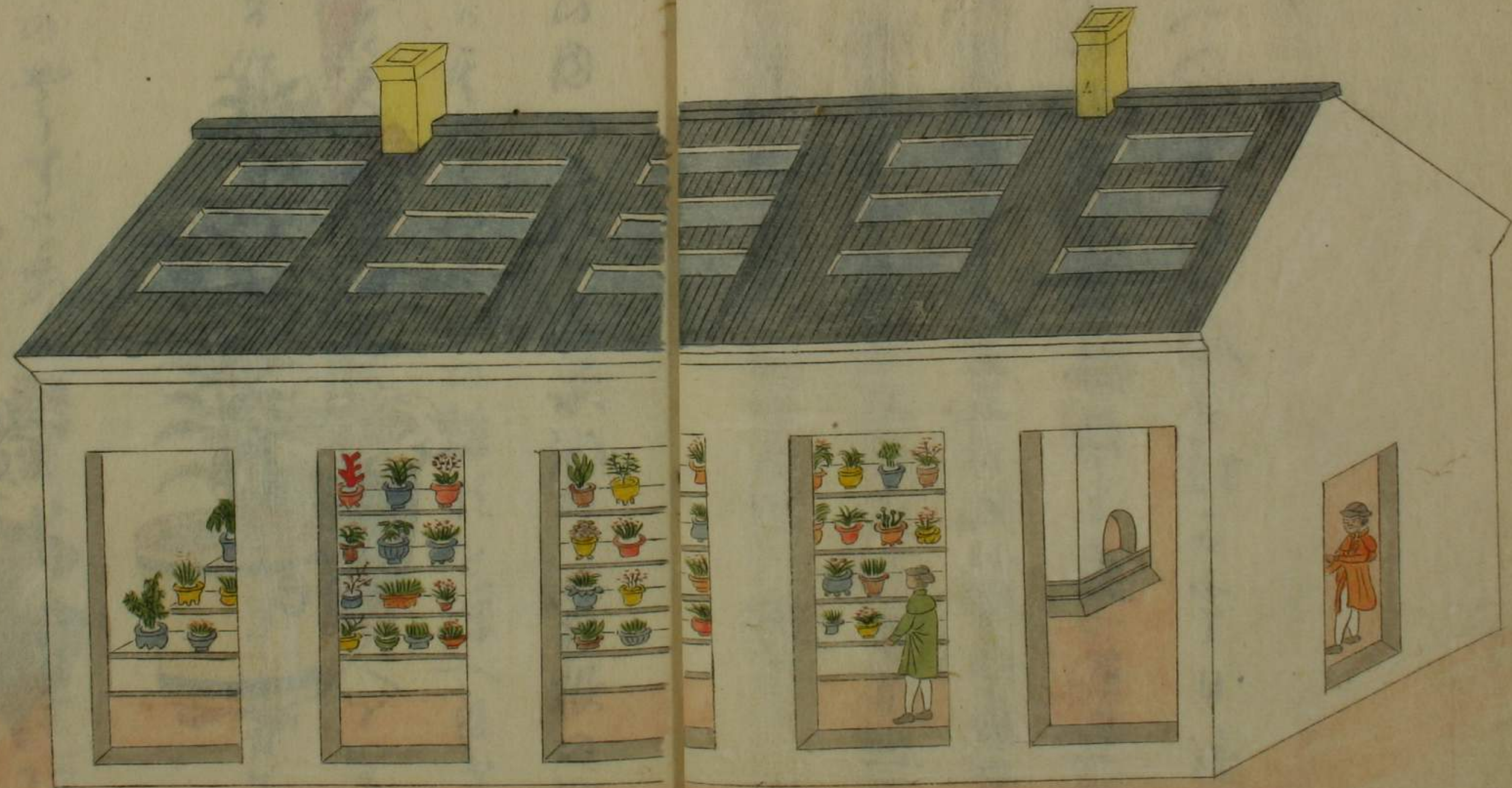
前よりいふよゝ歩行を府内を通行せしめ

あく外山の度毎車上の硝子障子よりツ開キんぬる  
中をみれば委しむる見及す

一日國王の法涼所といふ寺あり一見して其を  
アヒヒ

按ふ法涼所といふ寺を何といひしやあな  
遊苑の地あるべし是古又曰此所とツワリス  
セロといふ國王五月晦日ハふ日始りて七月  
晦日を居候しぬるなり

は所へ都下より廿八里ありけき此物川端なり皆  
大造ある鉄の欄干なり先へ移き法々十里程の百  
長屋の如く建並べしものありこれ雑植物の室  
なり戸を開きしる茶室の鉢植と並べしなり  
冷玉れ皆肉へ入る屋根硝子障子あり日影を  
文多紙ふたなり





此不鉢播一の肉一入れ、大泉池あり、紫根の湖  
 水程もあつきう、此肉は軍船の雛形を浮へ、  
 之階作、中石火矢窓、何り終ふ、此人にかさ  
 魚一奇、此肉を作、こゝをきえせ、こゝを  
 近付て、  
 見せ

殿内、この肉のやうす、よく見す、芝居座、何  
 十、これを見物、中付られ、此肉を出す  
 席座の内、此肉が、芝居程の棚と架、こゝを  
 近付て、





大いし木ありいふりし枝葉も根をとりし  
根多也葉は樟クスノキ不似て圓く葉はあまき藤豆の如し

按不<sub>レ</sub>以本榕樹<sub>ノ</sub>多<sub>ク</sub>南方草木状曰榕樹  
南海桂林多植之葉如木麻實如冬青樹幹拳  
曲云々又枝條既繁葉又茂細軟條如藤垂下漸  
及<sub>レ</sub>地藤稍入<sub>レ</sub>地即生根節或一大株有根四五處  
而橫枝及鄰樹而連理云々又此樹の<sub>子</sub>桂海虞衡  
志泉南雜志五雜組百川學海海槎餘錄南產志廣  
東新語等<sub>ニ</sub>モ出ス和蘭ニハ<sub>ハ</sub>ウ<sub>ル</sub>テ<sub>ル</sub>ボ<sub>ム</sub>根樹之義譯說曰具  
初生不異于他樹後枝上生細條飄蕩下垂及<sub>レ</sub>地則生

根久而成大株與木幹無異無數連結成巨林其高參  
天枝葉蔭々周圍有<sub>下</sub>及<sub>下</sub>意太里亞里法之一里者其枝  
條亦各出細根纏々垂地近望之殆如以繩索掛樹枝  
者

我 邦薩摩土佐紀伊等亦此樹アリ紀州  
方言アコウノ木ト云 根ハシユロ  
ホウキノ如シ 琉球ニモ産スト云  
薩州大島方言ガスマルト云ヨシ木ト此樹ハ暖  
地ノ産生ト見ユルナリ

蘭書必載 根樹  
 ウルテルボーム圖



は飯也 馴ざる 種々の 子草 菊木 可

鷄冠花 石竹花 風仙花 木上 木下 新植

この 籬 タコ と ころも 桶 多し

一里 庭園 古往 花 種 子 通 行 の 跡 次 多 土

きて 堆 積 し 金 砂 の ぬき も の を 交 へ 築 け

る こと 一 足 梅 け け け け

築山の上の 桜の木も 可

け 帝 帝 王 皇 后 母 后 も 臨 幸 可

此殿中の甚店を乙せしれし舞臺十間程も  
四方を塞<sup>フザ</sup>きし暗黒<sup>マツク</sup>ありしめ移く編帽  
と照<sup>トモ</sup>しるるり白晝のめくあすけり王女並  
陪<sup>トモ</sup>従の方くし漂流人のこを外の若の是物  
かし王の是物ふい正面よりけふく玉王の方  
へせりしをとお圖ふ舞臺あて笛大鼓をその  
頼とあししは音あふ應し王の歩初も拍子  
とりて入りのひかり相舞臺の前あつふ伶人<sup>ニタカタ</sup>

並飛笛大鼓琴胡弓等の鳴物をあしす浄瑠璃  
右史の如き若本を持ちしはたりあふあそせあ  
者曲をあす舞臺さしあつくの終をかきと幕  
とひく抱られ仕組は法國の事といふやうす也  
幕ぶらふ仕組のさう後きものさしあす本玉の  
事とすう時あつ本國風なり

草鞋とさきし若あき昔は彼玉の土人  
とさきしとあつとさきし  
大老曰乎と作  
あつとさきし

又黒人クロダウの玉の事を絞す時、家作、并ふ男女た、  
馬、彩を装束、其外、是して、其國の風俗あり  
戯子トクシヤ、男女を、男、男、女、女なり、男を、女形と  
いふあり、暫時の百、老少の、姿かゝりて舞  
臺、出、之、後、交、通、せ、ぬ、と、一、部、の、権、限、に  
持、此、方、の、甚、危、と、同、然、ある、や、す、也、踊、の、程  
云、男女、於、此、人、移、つ、ま、方、分、けて、お、と、方、此、中  
不、お、高、き、岩、の、上、お、女、之、人、を、う、預、る、に、岩、志、を、  
い、い、ホ

と、編、り、下、一、層、危、く、と、し、女、子、衣、下、り、踊、り、連、れ、  
あり、此、人、技、踊、り、了、し、五、六、人、程、お、上、り、一、層、よ、り  
ぐ、り、ぐ、り、め、り、り、て、踊、る、も、あり、け、時、是、物、人、の、心、を  
拍、て、笑、ふ、を、なり、王、威、く、く、と、お、出、り、の、あ、り、餘、の  
見、物、人、の、皆、是、を、意、へ、て、お、た、ぬ、お、ぬ、お、ぬ、お、ぬ、  
あ、ま、ま、大、の、報、を、り、一、部、の、仕、組、之、後、も、已、り  
ら、ぬ、の、故、事、く、く、合、點、を、し、り、た、あり、き  
一、日、後、又、一、日、市、中、の、大、甚、危、を見、物、を、り、あり

家ハ石造アリ 庭招糸く内も熱躰まろくつくり  
もろりの也 乙物不ハ土間棧及とりしり三面  
庭より下り小棚をかきもろりのなり子人不在も  
入らるる 榭へより 六の四方を塞ま 鳴馬おいて  
襦袢と燕と家の共中ハ硝子の 大燈籠と  
下く内ハ 板挺の 蠟燭と燕と 雌羽ハ庭下の  
方程ろくろくの 板と多く つまもろり 仕もろり  
誠ハ 朗アナルキある事 庭ふもろり 庭まろり 是物

する者ハ 老目鏡 虫めく 籠めて 見物ハ 是物

ハ 芝居も 國王より 建庭もよし 木戸 鉢  
まろり 銅鉢も 百枚 つまろり 如何の割合  
あろり 又は 銭も 上ハ 納り 虫 芝居 招糸の  
仕組ハ 往日官の 別殿 虫 是物  
庭ハ 往りして 庭もろり 庭ハ 五も 是物  
ハ 是物 庭もろり 庭ハ 別殿ハ 庭 是物

庭ハ

市中大戲場圖





此の留後、概し入るる五月の末、是れ一  
陽、羅紗の合羽振乃物と別ふ忌用せし  
大いふ寒き冷ふ是れ一あり

又一日槍見と善ふといふ所、新うて見せし  
きり

は、所の内、一丁、此地方の七、八の捕（あり）  
内を、まゝ、仕切あつて、大小乃、幼童、居たり  
入り、其子、其の名を、書付てあり

知見の、臥、床、意、事、乳、母、も、あり、徳裁<sup>スイモ</sup>  
洗濯、飲食、お、其、後、方、備、一、通、て、善、育、す  
生、も、お、ほ、い、ま、れ、一、稽、古、の、い、う、せ、好、む  
下、の、事、業、を、教、申、し、お、は、館、内、お、多、く  
の、男、女、生、も、の、ほ、い、ま、れ、一、細、工、お、多、く  
お、一、公、上、の、利、用、と、ある、も、お、少、く、一、は、と、あり

按、お、歐、羅、巴、洲、地、方、此、留、事、あ、り、一、明  
人、幼、院、と、稱、さ、る、もの、是、を、お、一、し、漂、流

人等たゞちあつて見多しの味漏遺如  
いふ一嘗て光吉史の話を付少せしふ  
都府中後方下の幼院大造の播一を  
其播の内の馬り外より馬り抜の及あり  
屋一人々往來孫子次第也たふ入る  
際して出入と止む相お中の各窮なる  
もの子を生きても善ひもこくむすいすべ  
困厄するもの多し玉王あ全の方便と  
ナキ

以て大れを建の表通る家あり捨  
也せんとする人夜中さふあや家  
とふまき者ある一月より引出のめ  
築城出たは月一其思を介をか  
のせり一年月日時を記しある牌と  
入るそ場をちり内おはを文たて乳  
母をそ育て生るは怪ひ館内は諸  
の師匠ありてまの種古を

一の男女児童の好む所の事業は何  
 法を以てし公用に使役する也其  
 恩養を以て家之戸に於て何月幾  
 何時に生きたりし事とくまに牌と  
 して事として其父母あるもの官の恩徳を  
 何の程に育ちぬ何たるも其れと  
 容子に及ぶ時其の通つ板の反を  
 由りたの牌を以て是を我子なりと

一の事とくまに生長の程も時として  
 其れを以て其れが事とくまに其れを  
 度して我家に入れたる男の時其れ  
 入れたる年月日時を以て其れを以て  
 度して其れを以て其れを以て其れを  
 其れを以て其れを以て其れを以て  
 其れを以て其れを以て其れを以て  
 其れを以て其れを以て其れを以て  
 其れを以て其れを以て其れを以て  
 其れを以て其れを以て其れを以て  
 其れを以て其れを以て其れを以て

いふ事か〜

病人の養生所もつくりとせよと云ふ事ありしを必大  
一見せよ

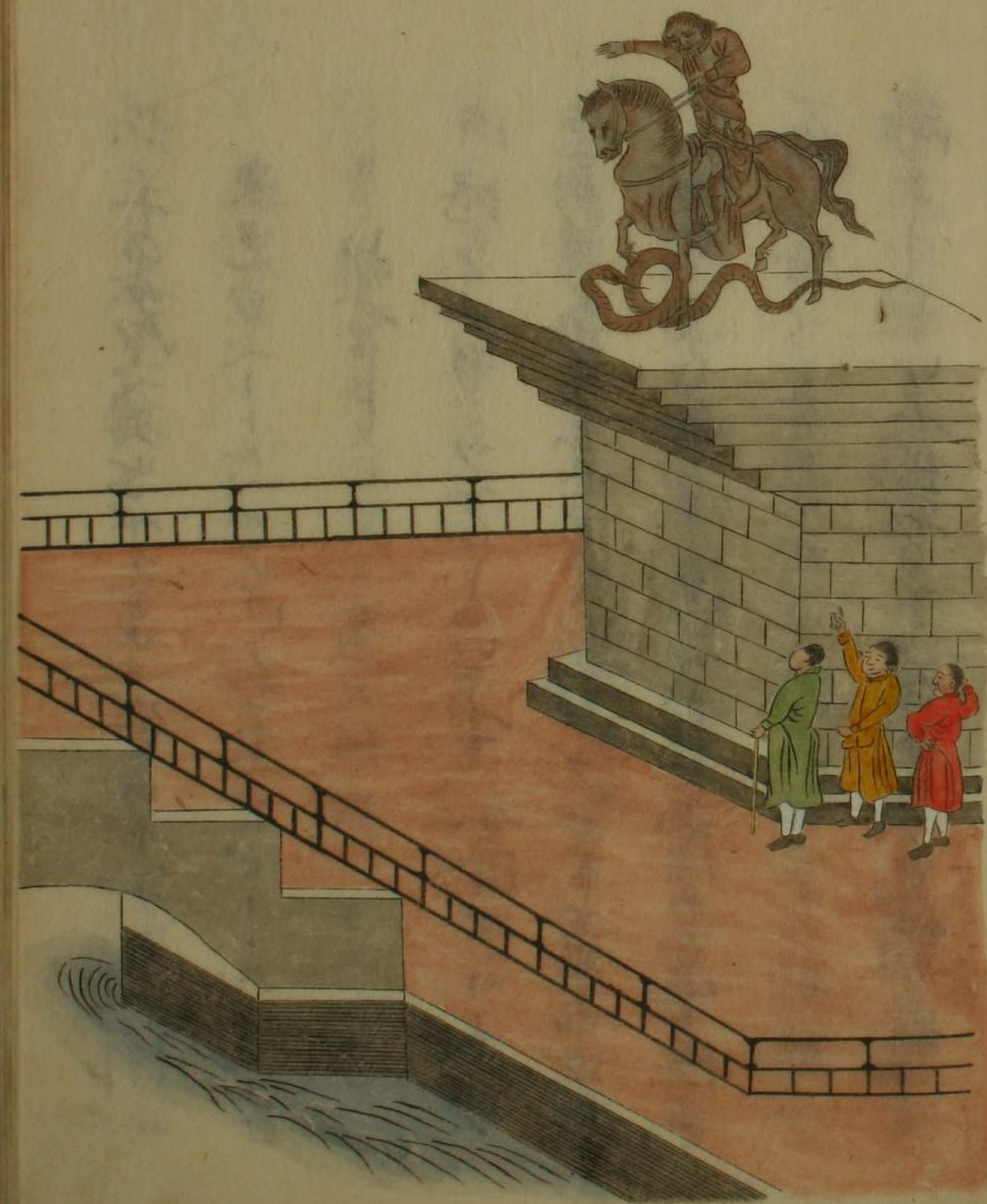
按て其の田舎を以て後寺ありとあり必大  
後亦ありと云ふ

名は信といふや明人の此を病院と傳ふ

學校もありし後寺と云ふと見申都府の

國史に

ハウラツケと云ふ町の内、唐塔ありて大陳地ヒヨケの  
振ありありと云ふ都下の其中にもありと云ふ  
思ふる手前の方より、轉書あり前より川あり川  
向の町ありて繁華の所ありて唐塔あり此塔を  
闡き帝王の位を履き〜といふ王の唐金像  
あり一丈四五尺程あり石を臺とありと云ふ織  
ありて三四拾間四方あり玉垣を圍ふ板石あり唐  
金像物ありと云ふありと云ふ王の像を建川たりの



手綱と持ちたののどし馬と大  
 白蛇とぬま〜させかろ脚を常人より丈高く  
 頭、拳毛チヒケを道〜耳も鼻もあてたなり  
 往來の人通つたう見るとすまてしなり  
 橋と唐をたしし事かか〜けののぬま  
 佛といふ事い振子なり

此の馬は唐の馬と云ふは其の馬の如くは  
 此の馬は唐の馬と云ふは其の馬の如くは

此王の名ペテルバイトロ バウロイチといひて  
大光曰ペートルペルライ 和名ふいピートルゴロ  
といふよし

此地をバウラツケといふも バウロイチの  
像ある故にちり生ふウラゼイメルといふ  
所の人あてましく漸く必と、廣め帝位を  
履み此ペトルブルカの地も偏せし新都と  
謂きしといふ出づるとあせる白蛇を殺して

諸民の難を救ひしよしある故に像もまを  
うりせりといふ

按譯説曰 嚙羅第墨兒 属于西魯西亞

曆数九百廿八年 本朝廷長 ヨリ魯西亞國

王コ、ニ都ス一千三百年 本朝正安 此地

ヨリ都ヲモスコウニ遷ス此府ハモスコウノ

東ニアリ

日本里数七十二里ニ在リト  
ウラゼイメルハ大の  
ウロゼイメル也

此新都ヲ開キシ由來年曆并ニ其王ノ傳  
記諸書ニ見ユ譯說別ニ有リ

左平侍少少此都原トハ雪陰スウエーツケの領

内ニありしが王の時ニ入れりとお付

王諸藝子通達一諸事を経歴するの

際裕一き手細工の類之も皆古き色

自り代りぬやといふ物たマノステライト云

大寺の納め並りりと形の造りくもは玉

ひてハ此王より始るといふ又法工職の者々

は細工よりして空腹もも易く腹十分

ありこれよりしてありて此等自り工

職をかして試み知るありて諸職人へ

後す杖持方給ふのもよきも此職列すお

應ふ法と定めぬやをきつて

一日都下を解程をぬきマノステライといふ

大寺へ一見ふきし

大寺一ヶ所  
此地一町に大寺あり石造り之内に合  
造りたる佛像あり此中一人坐す立  
つる佛或は坐す或は立すありを以て一  
掛る佛像あり縁に金銀の飾りあり  
光明菩薩なり

寺中の窓の如きあり窓の  
まはりにペテルバイトロバウロウチ王の立世  
の時に用ひしといふ櫓又此の寺にあり

都下

ある鉄の杖あり萩藤の内へこれを仕込み  
又何物かある唐銅の板は横文字を彫り  
付たる物もあり此の王の手細工のおとて  
種ありけり杖一振りし

は寺に諸王歴代の窓の  
和当付候もりし唐銅の七八人正具  
して漂流人へ出令せり冠りし黒綿  
緬より日本の婦人の用ひし物なり



物ふ似たり下是ハ筒袖にてケレスといふ  
もの付たるを忌す此上衣ハズウイズタ  
いふ星のつきも物也國王の法衣大抵  
同一振ふるゆ同形の新舊を不  
宗方ふ入りし由いひりぬ和尙經文の如  
きものをと出―禁―られぬ

按ふマステライを尼寺のものとすゆれニ  
傳ありし―は寺の縁起委―きゆあふ

へうしを一通りみえさせ―遺恨あり

都下第一の大寺なりといふ所を一見志すゆれを  
イサカツケセレコフといふ町の内ふあり石作松等ハ  
磨きたるありて大造あり經營あり善法  
あり今備せさりしといふ前代の王の遺骸を乾  
―固め棺―歛め一事ふ一交り、開くといふは尸  
骨―ハウラゼイメルと云所ふ葬壇―並けらふ  
此墓より煙―き氣立―る發煙―と云れぬ  
ホリフコ

其尸生人のめくおてまじしとて浮世寺（福）と  
かく大寺と造立せしとてたす

按ふペトルブルグ都府の圖六十、符籙を

アレキサンダラ子エフスケイの寺觀也といひ

和名非南涅尔ヒナンニエール所撰輿地の書よは玉往昔

の賢王 アレキサンデル 子エフスケイといふ王英

雄やして且徳義甚し人也ある今ふて土人

これを祭事すペトル帝新都を建し時ふ

此王の柩をウロミエルの地よりある遷し

寺觀と建てふりしとて漂人の作と符籙

帰帆前使節とサウットの志ふ往きふ日本尺ふ

て武天にむ寸程のち小人をえり海宴の舟

は伴の人食シツポクのよふのせ我美しといひきり漂流

人を指しし小人告し彼等日本玉の人も

汝も世ふ彼も海を了合銀を希望のふ與らる

了と我きりぬ日本新くいやすり彼人日本

あつたまゝカメイカの人をさしこしは小人  
何れより来りしと問ければカルラと人々を  
さし玉のくま又小人といふ者あり詳ふせきりき小人  
年二粒七粒をとりて飛ハ小くして粒もあつて年  
終ふは物事して是より詞もオロニアア辞をつひ  
後もか玉物と名せり

按北邊の盡境ハサモエデンといふ國あり

此土人皆矮小なりと近以魯西亞の所領と

チイサキ

を多し必ずしも小人あつてサモエデン詳説あり  
あり世も小人を多しといふはついでに  
カメイカを何れの地方か知れざれども近時オ  
ロシニアハ屬せし國のより遠く等イルコッ  
ツカ遠海中カメイカ人といふを又多しあり  
髪は黒く頭ハ魯西亞人同様ありとも又  
日本人程ありしと



右見物のふた百分の一といひうるが如し  
皆く出帆の車馬の取扱ちて見物も自在  
あつたると又多難多山の津海ありと此  
ニツハ己むゆとほすといふ一和菜もあふ  
ペトルブルカの都府圖ありと出せし  
小望洋とて知らるちかき彼ら是れと中  
せしとて貨物ふは圖を會し畏れを  
附して参考の一とせり

其年六月十一日と是へガラフより役人を以て中  
後されしハは夜日本へ使節船較後海にあり  
至て留國預り漂流人もに人右船へ同船送るに  
万出立用意可致候也若大悦して一同小騒ぎ旨  
情申ししなり

に人使節の級レサソトに送呼出候哉せ  
しふ船中用の諸品衣被も與つたふ

翌十二日津を更候年在年太十布は不出立

居残六人の若き人唯乞と為しを旅船中是と  
厚く世話文し人しをましく一禮しそおれと  
告げ屋を以て中カラフの屋敷前ある尼子花河  
より出ふ小舟ふ多あり荷物積み入カラフの役  
人三人並ふ新船も同船しおより南へ向ひて  
川筋を下り川幅は次第お廣くなり二十五里  
行きてカナスダといふ處へ到す

はあペトルブルカの都へ出入る湊口の地にて

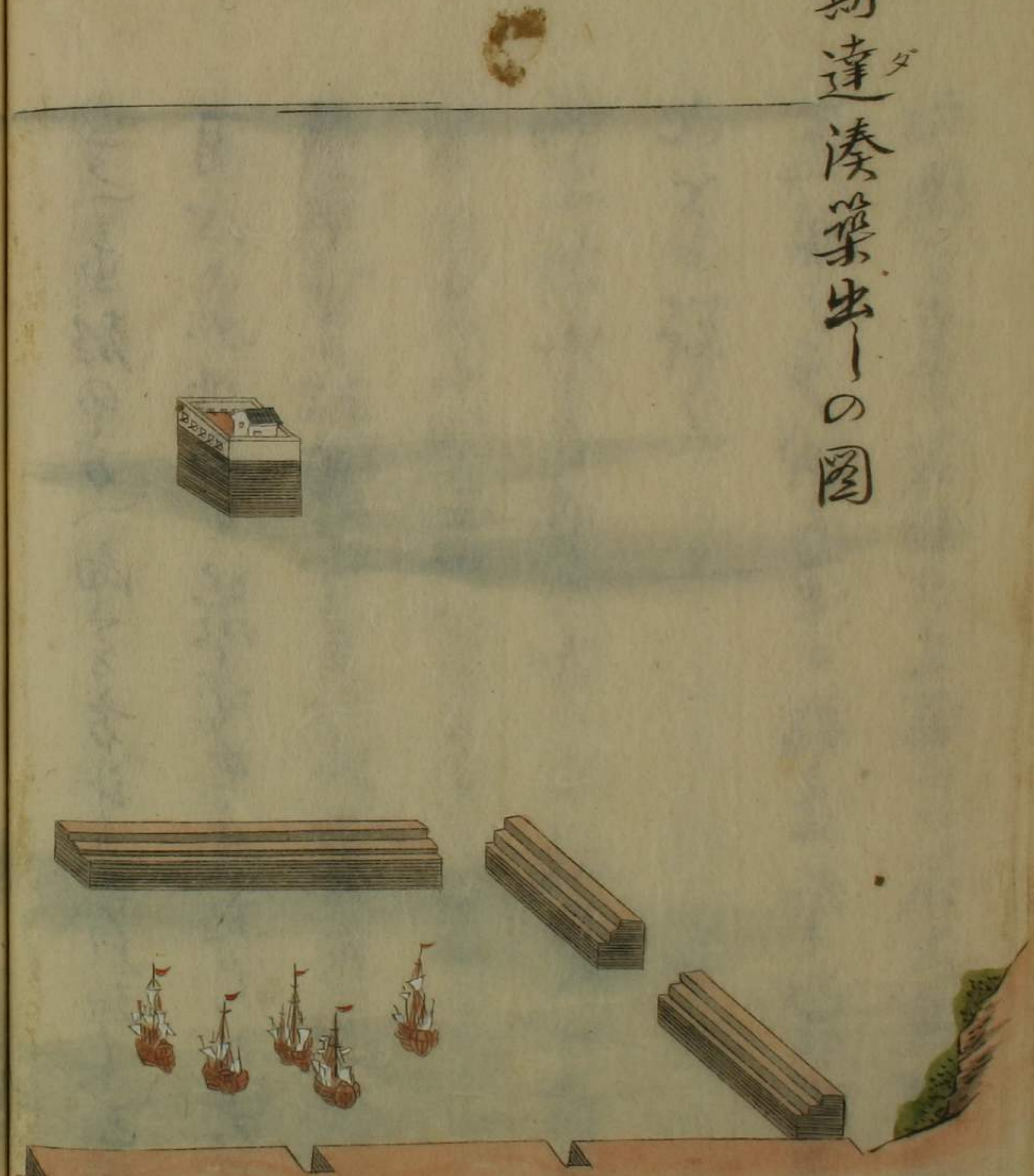
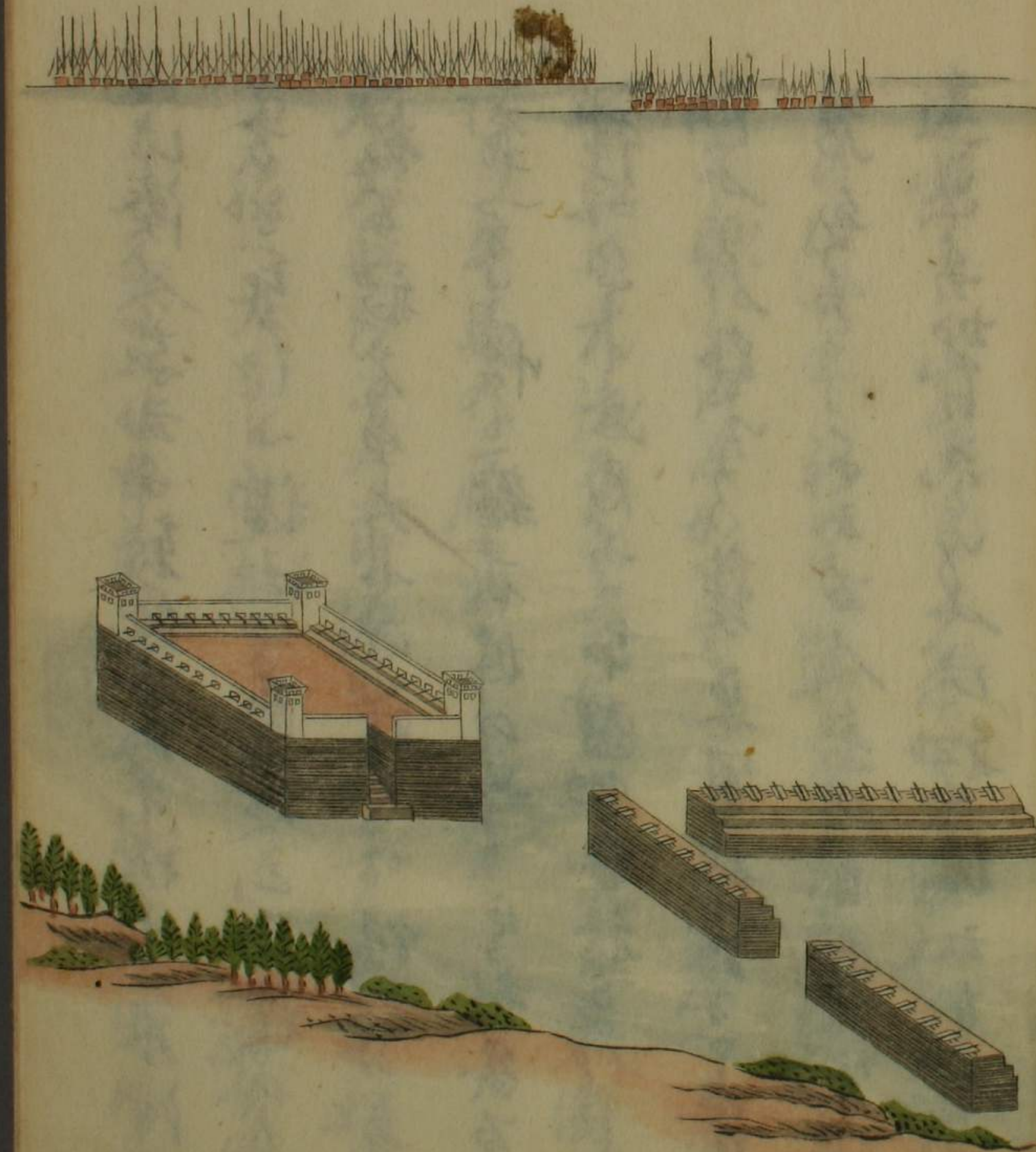
要害の地なりとては多におありて海のみくし  
同十五日をばお舟輕なりす 按は海和堂ふいふ  
オストセイにあるし  
は湊地より一ニ里の間切り居て海へ築  
出し又は是より一里半餘石垣  
築し一團ふは團の内汐入をて前と左右  
とふ船の入口をふと開くは月一船  
數艘を繋ぐは月お軍船も多あり何れ  
も多あり是れ小船は月お船輕なりす

は團とてす石垣の上面ハ石火矢敷挺  
す一並く此例ハ玉も夥爰に新あり番  
おとも復く

此亦他玉より都の方への船の入口に有  
害のふあふかく據しつるものとす  
又此おより向ふあり切石を敷きあけ  
たふ小島と作方一里四方もつるし其申ふ  
陣倉根の物と建て之面ハ石火矢と並べ

す一並都の方へ向ふ方斗りこれ亦し三面の  
用心ハ此玉て嚴重也此はたを大船  
通す新番おともりしハ此例あり

加<sup>カ</sup>那<sup>ナ</sup>斯<sup>ス</sup>達<sup>ダ</sup>湊<sup>ミナト</sup>築<sup>キ</sup>出<sup>デ</sup>の<sup>ノ</sup>圖<sup>ズ</sup>





は倭人亦武子新館もある振ふる河沖の  
方と申む小諸玉の南に本橋オハシラのり  
教百艘ある舟大小の船其の帆柱のま  
並つる。恰も雑木林の如し。其教幾百と  
計つる。此月ハ中國の番船もあつと  
いふ。これ外にも諸島東軍船もあると云  
為ありと。子五百人余の自國の軍船  
もあつと云ふ。かけらといふは船、橋を申す

遠見ハ山の大とく、その中なる軍船の大は  
毛のけまを、神りて、造りてなりは船を  
晴と、シと、まなかつて、川を、と、若つたれ  
軍船の大法なるを、申す。申すハ、菜園も  
あり、牛馬の厩もありと云ふ  
右大船、汐干の岸、湊出、と、するハ、申すの  
も、船、大なる空船カラフネを、一艘つ、其の羽、  
め、つ、あ、つ、け、申す。浮、上、振、り、て、出、  
云

按ハバカナスダといハ濠州和東西を譯  
シテ呼ビタルのコロニスロットある和  
系人の書キ上ケルコロニスロットハ於テ  
使節船乃用意ありしと云ハ也和系  
兵撰魯西亞國志ニコロニスロットハ新  
都ペトルブルカラ去ルドイツランドノ里法  
ニテ凡ソ四里舟船湊會ノ要港人居蕃  
盛ナリコトニ要害ヲ撰テコノ兵ヨリ富カハスノ所

徳海ニ泛フ云

大光曰カナスダハカランスタニオストロワ鳴なる  
魚ノ地ニハありテ海ノ都ナリ五里隔  
てりといふ

再以源実推乃朱ヲ四大洲分圖を註釋する  
コペトルブルカよりイノ離れル者一島あり其  
名を彼國字きて  
コロニシタト  
と記せり

必ず此處をカナシタトと誤りていふ所

同十三日 午後よりモ里解沖へ哨船<sup>テニマ</sup>を漕出。日  
本使節船へ系船あり

使節の役レサノットを先遣て船の中へ在り  
船中諸事の用意をおし船頭以外それの  
役と引扱ふに伺もレサノットの前へ出立方  
儀送ふ領事謝儀を厚く申述あり使節令新  
より金銭式十枚と袂時計をツ充ち後す  
是玉王より各領事おしと銀を相謝し是

おはせと文く(船中人)大分おは(人)の

ガラフハ前以は中船へ乗りしに外に外中後  
のりもまじし。且伺もへの相領物を承り  
可成後の交際へ出立も是なり中船へ系船も  
延引ふありしに等の子使節へ附属し  
静へ留りし中途舟の遠ふたゆしりしは  
しこれ國王誕辰の祝事あるの日お招きあり  
として急ぎ留静のし

船中の人の話ふ先達て國王もけふを奉れ  
船もかぎり多し船中の様子一説せしれ回  
船の老も老後達者て海路日並日本  
の事ともあしくそて帰れと命ありしと  
語れり

け日ガラフより附添申し三人毎ニコライ新義も  
暇乞しと都へ帰れり

中船系組の人教後人々大抵武松人となり船方の

此口松人餘も居しと是ゆ  
別巻に  
詳あり

蘇海異聞卷之十一

...

...

...

...

...

...

...

